

シラカバ花粉症に関連する口腔アレルギー症候群の血清学的診断について

○白崎 英明 (札幌医科大学)、山本 哲夫 (やまもと耳鼻咽喉科)、氷見徹夫 (札幌医科大学)

背景と目的：シラカバ花粉症においてはリンゴ、モモなどのバラ科果物に対する口腔アレルギー症候群(Oral allergy syndrome 以下 OAS)が高率に認められる。診断は一般的に問診と血清中の抗原特異的 IgE 検査、皮膚反応や食物の負荷試験によってなされるが、後二者はアナフィラキシーショックなどの重篤なアレルギー反応を引き起こす可能性があるために抗原特異的 IgE 検査が一般的に用いられる。現行の保険診療の範囲内では、検査試薬には粗抽出抗原が用いられる。粗抽出抗原を構成するタンパク質をアレルゲンコンポーネントと呼ぶが、粗抽出抗原には多数のアレルゲンコンポーネントが含まれているため、検査結果は目的以外のコンポーネントの影響を受けやすい。今回、我々はシラカバ花粉症に伴う OAS 症例の血清を用い、コンポーネント解析の有用性について検討をおこなった。

方法：リンゴないしモモに対する口腔アレルギー症状を有するシラカバ花粉症症例 (リンゴ OAS:26 例、モモ OAS:23 例、合計 30 例) の血清を解析した。リンゴとモモに対する従来の粗抽出抗原(に対する特異的 IgE 値と、PR-10 関連のコンポーネント(リンゴ:Mal d1、モモ: Pru p1) に対する特異的 IgE 値をイムノキャップ法にて比較検討した。

結果：カットオフ値を 0.35U_A/mL (スコア 1) とした場合の粗抽出抗原での臨床的感度 (sensitivity)は、リンゴ 65%、モモ 74%であったが、コンポーネント解析ではリンゴ 92%、モモ 96%であった。コンポーネント解析は OAS の診断に有用であることが確認された。札幌医大では 1995 年から花粉観測をしているが、過去 23 年間の花粉飛散状況についても報告したい。